

防災・減災の輪

かがわ自主ぼう連絡協議会
会報 第36号(2010 02 28)
事務局川西地区自主防災会

「百年兵を養うは、これ一日のため」

香川県防災局 防災指導監 乃田 俊信

かがわ自主ぼう連絡協議会の皆様におかれましては、平素から地域の防災・減災の要としてご尽力・ご活躍されておられますことに対し、心から敬意と感謝申し上げます。

さて、県では2月10日に、テロ事案に対する対応能力の向上を図るための「香川県国民保護共同図上訓練」を行いました。その時の話です。

某新聞社の某記者が取材に来て、「平和な日本で、何も無い現在、何故こんな訓練が必要なのか？」という質問を受けました。愚問にがっかりする気持ちを抑えながら、「大地震などの大災害に備えるのと同じです。何も無い今、危機(災害)を思い、備えておかなければ間に合わないのでは？」と答えました。

中国の古い言葉に「百年兵を養うは、一日にこれを用いるがため」というのがあります。これは、皆様よくご存知の言葉であり説明は要さないと思いますが、私は、「長い努力の積み重ねがあって初めて、国家の危急存亡の時にその効果が発揮される」という意味に解釈しております。「白髪三千丈」と同じく、中国人独特の誇大表現ですが、百年という途方も無い長い期間と、一日と言う短い期間を巧みに対比させ、長い努力の積み重ねの大切さを強調しています。

私は、防災も全く同じことではないかと思えます。(ただし、防災の話をするときには、表現をやわらかくするため、「百年兵を養うは、これ一日のため」というようにしております。)



乃田指導官の講演300回目の様子

ここで一番問題となるのは「一日」です。この「一日」があらかじめ分かっているかどうかです。分かっている場合、例えば、〇〇大学受験とか〇〇大会出場とかという場合は、目標（日時）がはっきりしており、努力の集中発揮が容易です。一方、防災をはじめ危機管理一般などについては、その「一日」がはっきりせず、努力の継続がなかなか難しいということです。

人は努力をすれば、直ぐその成果・結果を見たがるものです。成果が（計数的・具体的に）目に見えないと、今までしてきた努力が無駄だったように思いがちです。しかし、古代中国の精強な軍隊は、国の存立と領民の生命・財産を守る抑止力となったであろうし、防災への努力は住民の安心に大きく貢献しているはずで、その「一日」がいまだ来なくとも……。

「災害は、忘れたころにやってくる」という言葉もあります。これは、「災害は、前の災害を忘れるくらい、しばらく間隔をおいて起こる」という意味ではなく、「災害は、備えようとする人の心に緩み・隙間ができる（ころ）と、やってくる」という意味だと、私は思っております。

あの阪神・淡路大震災において、あれだけ被害が大きくなった最大の原因は何であったかという点、「防災意識が低く、全くと言っていいほど備えを実施していなかった」からと、専門家の多くは指摘しています。

関西の人たちは、阪神・淡路大震災が起きる前までは「地震は関東で起きるもの、台風は紀伊半島に上陸する。関西は災害の無いよいところ」と思っていたようです。まるで、どこかの県と同じですね。関西にも、かつて宝永地震や安政南海地震といった大地震に遭い、大被害を受けた経験を持ちながら、やがて風化しその教訓を十分には活かせなかったのです。

私たちが、「その「一日」が先のことで分からない」とか、「成果が具体的に目に見えない」とかで、努力の継続を中断したり、心に緩み・隙間ができるのを、災害は待っているのです。

「見えないその「一日」のために努力を継続すること」。難しいことではあるが、災害に負けない唯一の方策だと、私は思います。



乃田指導官の講演300回目の様子